「ルッキン・フォー・マイ・リトル・ピグミー」

松村　有紀子

○大学病院・入院病棟（夜）

真夏の夜。夜中でも、電灯の下に集まって鳴く、蝉の声のシャワーが聞こえる。

ベッドに仰向に横たわっている春木一（イチ）（１４）。

頭のてっぺんからつま先まで、全身包帯だらけ。うなされている。

○一の夢

白っぽい背景に、人影数人がゆらゆらと動きながら噂話をしている。

人影Ａ「春木さんとこのいっちゃん、もらわれっ子なんですって」

一Ｍ「うるせえ…」

人影Ｂ「あら、それであの奥さん心の病気を？」

人影Ａ「病気はもっと前からららしいのよ」

人影Ｃ「若くからお薬飲んでたら、子供産むのは難しいわよねえ」

一Ｍ「めんどくせえ…」

人影Ａ「旦那さんも、中学校の美術の先生だけど、休職中らしいわよ。お気の毒に」
人影Ｂ「ほんと、お気の毒に」
一Ｍ「うるせえうるせえうるせえ！めんどくせえめんどくせえめんどくせえ！」

○大学病院・入院病棟（夜）
一、うなされている。
一「めんどくせえ……」
同室の老人（７７）、一の足を揺り動かす。目を覚ます一。
老人「めんどくさいなんて言うもんじゃない。おまえの寝言で起きちまったじゃないか」
一「あ…、すみません」
一、再び眠りに就こうとするが眠れない。
一Ｍ「体が…（熱くて痒い）！」
包帯の上から掻こうとするが、包帯が邪魔して皮膚に届かない。
一、うめき声をあげて、起き上がる。
廊下へ出て行く。

○同・オープンスペース（夜）

廊下に隣接したオープンスペース。

月の光に照らされた机で、絵を描いている、柊のの（１４）。

一より少ないが、頭を含めたところどころに包帯を巻いている。

一、通りかかる。

ののの影に、びくっとして立ち止まる。

のの「こんばんは」

一「…こんばんは」

のの「眠れないの？」

一「…うん。痒くて…」

のの「ちょっと待っててて」

のの、何処かへ走って行く。

×　　×　　×

のの、ぼーっと突っ立っている一のところに戻ってきて、アイスノンを渡す。

のの「はい、そういうときは、冷やすといいよ。ナースステーションで、もらえるか

ら」

一「あ、ありがとう」

○同・屋上（翌朝）

洗濯物を干す一。

いまだ全身包帯だらけである。

傍らに腰掛けて一と喋っているのの。

のの「へえ、一昨日から。わたしは明日でちょうど一ヶ月。退院まで二ヶ月はかかるらしいよ」

一「厄介な病気だな。それにしても、昨日は本当に助かった。おかげであの後は良く眠れたよ。ありがとう」

のの「経験者だから、何でも聞いて」

一「よろしくお願いします」

のの「よろしくね、一くん」

一「一でいいよ」

のの「一っていい名前だよねー」

一「前の親が付けたらしいけどね。日本一簡単だから適当に付けたんだろ、きっと」

のの「へえ…、前の親…。わたしの名前なんて、傑作だよ。うちのお母さん、漢字苦手で、字書くのもめんどうくさくて、その場で思いついた一番簡単そうな名前が、ののの」

一「それ、ウケる～、捨て猫じゃあるまいし」

のの「よく可愛い名前だねって言われるから、いいんだけど」

一「ふっ。名前なんて適当だよなー。育ての親は、一番の一、だなんて言ってるけど」

のの「似てるね、わたしたち」

ののの、一に向かって右手を差し出す。

一、一瞬戸惑うが、その手を握る。

包帯だらけの一の手と、少しだけ包帯が巻かれたのののの手。

ののの「もう一回。よろしくね、一」

一「よろしく、ののの」

○タイトル

『ルッキン・フォー・マイ・リトル・
ピグミー』
空を飛び回る鳥の群れをバックに。

○大学病院・屋上
看護婦の水木夏梨（２８）、一を呼びに
来る。
夏梨「いたいた、一君、先生が診察室に来る
ようにって」
一「え？回診じゃなくて？」
夏梨「大事な用があるみたい」
一「分かりました」
一、ののに向かって、
一「じゃ」
のの「またね、一」
のの、手を振る。

○同・皮膚科・診察室
カーテンの前で待つ医師。
カーテン内のベッドの前で夏梨が一の包

帯を外している。
医師（６２）、手招きすると、離れて待っていた十数人の白衣姿の医学生たち、カーテン前に集合する。
医師「結節性痒疹の患者だ。いいかね？」
カーテンの向こうから、夏梨の返事が聞こえる。
夏梨「はい」
医師「ちょっと失礼」
医師、カーテンを開ける。
裸で立たされている一。
顔も含めた、全身が皮膚病で、傷だらけ。
一、医学生たちがいることに、ぎょっとした顔をする。
一「き、聞いてねえし…」
白衣を着た学生たち、容赦無く一の裸を覗き込む。

○同・廊下
一（声）「ざけんじゃねー！俺はおまえらの

モルモットじゃねーんだよ！！」
一の怒号が廊下に響き渡る。

○同・オープンスペース
いつもの机で、絵を描いているのの。
一の声に、顔を上げる。
のの「一！」
スケッチブックを置いて、駆け出す。

○同・廊下
のの、駆けて来て、診察室の前で立ち止まる。
中では、一が医者らに向かって怒鳴り抵抗している様子。
ドアをノックして開けようとするのの。
のの「一、どうしたの？」
夏梨が顔を出して、ののを制する。
夏梨「ののちゃん！今はダメ」
ののの視界。

ドアの隙間から、一の後ろ姿が見える。
皮膚病の傷・斑点だらけの背中。

○同・皮膚科・診察室
夏梨「あなたたちは出て行って！」
退散する医大生たち。
背中で大きく息をしている一。
一にガウンを掛けてやる夏梨。
夏梨「そうです、…いくらなんでもこんなの
拷問です！」
医師「大学病院なんだから、そういうつもり
で来てもらわなきゃ困るんだがね」
一「うっせー！患者の気持ち無視して、それ
でも医者か！！」

○同・食堂
再び包帯だらけになった一に、お茶が
入った紙コップを差し出す夏梨。
ののも横に座っている。

夏梨「そうだよね、わたしだってあんな人数に寄ってたかって裸見られたら、嫌だもの」

のの「わたしの時も嫌だったけど、何も言えなかった。一が言いたいこと言ってくれてスッキリ。大丈夫、きれいに治って見返してやろ」

一「なんか疲れた」

天井を向いてため息をつく、一。

一M「ののは、それからしばらくして退院し、俺もその一ヶ月後に退院した。俺の中二の夏休みは、まるまる病院で過ごしたことになる」

○春木家・外観（一ヶ月半後）

季節は初秋。古い一軒家。

○同・縁側

退院して帰って来た一。完全に包帯が取れ、本来の姿が初めて見える。

一、門をくぐるとすぐに庭に繋がれている愛犬ハリーのところへ直行する。
気配に気付き、顔を出す、育ての父、春木伸夫（５４）。
伸夫には吃りがある。
伸夫「迎えに行けなくてごめ、ごめんな。母さんから目が離せなくて。今、あの、ほら、そ、躁転しちゃってな。か、代わりにケーキ、焼いておいた」
一「別に、迎えなんて必要ないし」
素っ気ない一。

○同・リビング
テーブルに置いてあるケーキをよそに、鳥かごからインコのソラを出して、肩に乗せ、出て行こうとする一。
伸夫「あ、ケ、ケーキ……」
一「いらないし」
一、リビングの戸をピシャッと締める。

○同・一の部屋

部屋に入って来る一。

机の上に、花の活けてある一輪挿しが載っているのを見つけると、ソラを椅子の背もたれに優しく留まらせ、一輪挿しを鷲掴みにして、乱暴に部屋を出て行く。

○同・陽子のアトリエの前の廊下

陽子のアトリエから聞こえる、大音量のオーケストラのＣＤの音が少し籠って聞こえる廊下。

一、乱暴に歩いて行ってアトリエのドアを開ける。

○同・陽子のアトリエ

大音量のオーケストラが、一の耳をつん裂くように飛び込んで来る。

部屋の中央には派手な百合が活けられ、育ての母春木陽子（４９）が、一心不乱に絵の具やクレヨンで、花を描いている。

部屋に入って来た一には気付かない。
一、コンポに近づき、停止ボタンを押す。
振り向く陽子。
一「何勝手に人の部屋入ってんだよ！！」
陽子「あら、いっちゃん、おかえり。お花、活けといた」
伸夫、部屋に入って来る。
陽子「昨日から調子いいのよ！寝ないで絵描いてたの」
一「今日は超元気モードかよ…お願いだから、徹夜とかしないで寝てくれよ…すぐテンションおかしくなるんだから」
怒る一と、妙に明るい陽子。
会話が噛み合っていない。
伸夫「かあさん、昨日からず、ずっとこの調子なんだ。理解してくれ」
一「見てるんなら寝かせろよ」
伸夫「今度こそいい絵が描けるはずだから止めないでくれって、こ、懇願されてな…」

一「だからこんな家……」

陽子「わたし、今は絵を描かなくちゃいけないの」

再生ボタンを押す陽子。

耳をつんざくようなオーケストラ、再び。

一「くそ！」

部屋を出て行く一。

○ののののアパート

古いアパートの一室。

ののの口ずさむクラシック音楽の鼻歌が聞こえている。

一目で母子家庭と分かるインテリア。

スナックで働いている母親の安っぽいワンピースが掛かっていたり、カップラーメンの買い置きがあったり。

物質的には裕福ではない生活空間だが、カーテンが明るいパッチワークであったり、襖の破れ目がセンスの良いカッティングシート等で美しく隠してあったりし

て、ののクリエイティブな様が画面から伝わる。
ののの、ちゃぶ台兼机に向かって、鼻歌を口ずさみながら、一心に海のイラストを描いている。
厳しい現実と対照的な、夢のある世界が描かれている。

○葉山の海岸の芝生地帯（一週間後）
ののの「これ。退院おめでとう！」
ののの完成したイラストが額に収まり、夏の終わりの海をバックに一の手に掲げられている。
絵に描かれた場所だと分かる。
一「ありがとう」
ののの「一は包帯取った方が、ハンサムだね！」
一「これが普通だし」
苦笑するが、嬉しそうな、一。
ののの「ここ、わたしの大好きな場所。辛くな

ったら、ここに来る」
一「辛いの、今？」
のの「うん、もう慣れたけど…退院したら、いじめの標的になってた」
一「俺もやられた。教室行ったら、机の上に花があって」
小さくため息をついて、海岸に仰向けに寝転ぶのの。つられて寝転ぶ一。
のの「ここに来るとさ、月並みだけど、自分ってちっちゃいな、あいつら、もっとちいせーな、って思えて、大きな気分になれる」
一「うん、ちいせーよな、あいつら」
広い空に、波の音が響いている。
のの「あと、絵もそう。辛い時に、描くの。すべてのクリエイションって、そうやってできてるのかなあってさえ思える。現状に満足してたら、きっと何も作れないよね」
一「辛い時…そうなのかな。あれは辛いのかな……」

のの「お母さんも、辛いんだよ……思うように描けなくて。その絵、お母さんにも見せてね、絵本作家なんて、憧れるなあ」

一「でも、そんなの昔のことだし」

のの「絵本、もう描いてないの？」

一「絵本はどうだろ？ずっと病んでる絵ばっかり描いてる。遊びに来ればいいじゃん」

続く会話に重なる、一のモノローグ。

一M「海に抱かれているような感覚。繰り返す波の音は、母親の胎内で聞こえる音に似ているのではないかと、ぼんやり思った」

仰向けで寝てしまう二人。

○同（夕方）

夕陽に照らされて目覚めるのの。

一を起こす。

のの「一、魔法の時間だよ」

夕陽を見つめる二人。

一M「母なる太陽が、沈んで行く」

○葉山の神社（夜）

懐中電灯で足元を照らすのの。

のの「ここ、お参りすると、いつも願いが叶う。必ず」

一「ほんと？」

のの「今叶わなくても、長い時を経て、いずれ」

一「なーんだ」

のの「一もお参りして」

賽銭を入れ、丁寧に、二礼二拍手一礼をするのの。

ののの真似をしてお参りする一。

一、祈りを終えてののを見ると、まだ一心に何か祈っている。

ののに合わせ、もう一度手を合わせる一。

ののが祈り終えたところで、一、ワンテンポ遅れて手を下ろす。

○バス通り（夜）

バスに乗り遅れる二人。

○春木家・外観（夜）

吠えるハリーの声。

陽子のヒステリックな怒号。

陽子（声）「こんな時間まで、どこ行ってたの？！」

○同・リビング（夜）

時計は午後十時を過ぎている。

一と向かい合い、怒りを露わにする陽子。

一「…だから、バスに乗り遅れて……」

陽子「お母さん、心配したんだから！」

一「ケータイの電源も切れてて……」

陽子「言い訳ばっかり！自分勝手な子！！」

伸夫「その辺にしないか……一だって、は、反省してるんだし」

陽子「いいえ、反省の気持ちがちっとも伝わって来ないもの！育て方間違ったのかしら？それとも、血のせい？」

一「なっ……」
伸夫「陽子、やめない…か」
陽子「あら、わたしのせい？！病気だから？」
伸夫「そうだ…今はびょ、病気なんだから、ちょっと落ち着いた方がい、いい」
陽子「そうよね、病気のわたしが悪いのよね。いっちゃんじゃない、全部わたしが悪いのよ。いっちゃん、うちに来て間もない頃、みんなでハワイ行ったら、アラモアナショッピングセンターでいなくなっちゃって、声張り上げていっちゃん探しても出て来なくて、そしたら、自分で、お店の服と服の間に隠れてたのよね。いっちゃん、あのまま見つからなかった方が良かったのかしら。覚えてる？わたし大声で泣いたのよ」
一「覚えてるわけねーだろ。そんな昔のこと」
陽子「小学三年生の夏休みに、ハリー連れて家出した時もそう。暗くなっても帰って来

なくて、わたし、狂いそうだった。でも、反面、このまま見つからない方が、お互いのためかも知れないって思ったりもした」

伸夫「陽子、そ、そんなこと考えてたのか」

一「……」

陽子「いっちゃんがいなくなると、いつも自分が怖くなるの。もしこのままいっちゃんのいない世界がやって来たら？って。もし、いっちゃんがうちに来なかったら？って」

一「それが本音かよ」

陽子「ううん、違うの。悪いのはいっちゃんじゃなくて、わたしよ。わたしが選んで、いっちゃんに来てもらったんだもの。でも…育て方、間違っちゃった。ごめん、いっちゃん」

一、呆れたように立ち上がる。

一「もー、一人で勝手に悲劇のヒロインになってんじゃねーよ！俺だって、好きでこのうちに来たわけじゃねえし！」

伸夫「一！それに、陽子も！！」

一「あんただって、見てるだけじゃねーかよ。育て方間違ったの、この人だけじゃないだろ？あんたなんか生き方間違ってんじゃないか？！この人なんでこんな風になっちゃったんだよ！」

伸夫「は、母親に対して、こ、この人はない、ないだろ？！」

一「いいだろ？この人、他人なんだから！育て方、間違ったんだから！！」

出て行く、一。

○路地（夜）

ハリーと一緒に走る、一。

一M「育て方、間違った、育て方、間違った、育て方……」

一の目に涙が滲む。

○春木家・リビング（夜）

陽子を抱きしめる、伸夫。

陽子「ごめんなさい、わたし、言っちゃいけ

ないことを……」

○同・キッチン（夜）

一人、ひたすらガスコンロをピカピカに磨いている、伸夫。

玄関の引き戸の音に、顔を上げる。

○同・一の部屋（夜）

入って来て、ベッドに寝ころぶ一。

ノックしてドアの隙間から呼びかける伸夫。

一、伸夫に背を向け、目を開けて横たわっている。

伸夫「わたしたちは、傷つけ合うために、お、おま…えと、か、家族に、なったんじゃな…ない。お、おま、おまえだって、そんなこと、望んじゃいない…いないだろ？…イ、イチ」

黙っている、一。

伸夫「おやすみ」

静かにドアを閉める、伸夫。

○ののアパート（早朝）

時間は、朝の５時。

ののの母、柊あおい（３５）、男（５２）に担がれ、帰って来る。

男「ママ、勘弁してよ」

キッチン横の玄関に倒れこむあおい。

ぐでんぐでんに泥酔している。

ふとんで寝ていたのの、物音で目を覚まし、起き上がる。

男「しょうがねえなあ」

あおい「のの、お水～～～～」

のの、黙って立ち上がり、水道の水をコップに流し入れ、差し出す。

あおい「水道水なんかいらないわよ！」

コップを手で払う、あおい。

コップ、床に落ちて割れる。

男「おいおい」

割れたガラスを片付ける、のの。

あおい「のの、ちょっと、お金貸してよ」
　ののに向かって、乱暴に、ちょうだいの
ポーズをするあおい。
のの「え」
あおい「お金、ママに貸してちょうだい」
のの「まだ今月のお小遣いもらってないの
に」
あおい「ないんだからあげられないじゃない。
だから貸して」
のの「ていうか、すでにわたしの貯金、勝手
に使ったでしょ」
あおい「あーら、バレた？ごめんね」
男「あーいいよ、タクシー代くらい…」
あおい「えーいいの？ぶんちゃんたら太っ
腹！ありがと」
男「じゃ」
あおい「ああん、まだ帰んないでよ～」
　男の肩に腕を回す、あおい。
あおい「のの、ちょっとコンビニにでも行っ
てなさい」

のの「また？」
あおい「お水買って来て。すぐ帰って来ちゃダメよ」
のの、ため息をつき、襖を閉めて隣の部屋へ行く。

○同・隣部屋（早朝）
薄明かりの中で、着替えるのの。
ブラジャー姿になったところで、不意に襖が開いて、男が顔を出す。
男「おっ、そろそろいい女になって来たな」
のの「きゃっ！」
隣の部屋から、あおいのイライラした様子の声。
あおい「のの、早く行って来てよ！」
のの、急いでトレーナーを羽織り、男の隣をすり抜けて出て行く。

○川沿いの道（早朝）
猛スピードで自転車を漕ぐ、のの。

朝日が上ってくる。

○同・リビング

泣きじゃくる陽子の向かい側に座る、

陽子の妹、上野桜（４７）。

桜「お姉ちゃん、大丈夫？」

陽子「無理、もう無理……」

桜「だから言ったのよ、あのとき。養子なんて大変だからって。病気だって、良くなるどころか、全然治らないじゃない」

陽子「病気のためじゃない、わたしが望んでうちの子になったのよ、一は。ほんとはいい子なの。反抗期なだけなのよ」

桜「確かにいい子よ。でもお姉ちゃん、いっちゃん帰って来てからストレス倍増になってない？」

陽子「一を悪く言わないでちょうだい。悪いのはわたしなんだから」

桜「育て方間違った、はまずいわよねえ……でもねえ、（少し声のトーンを落として）

兄さんだって休職中だし、このままじゃ一家共倒れよ。いっちゃんには悪いけど、少しの間、うちに来てもらったら？パパの介護の手伝いもお願いできるし」

陽子「何よ、一もパパも邪魔者扱い？！」

桜「あら、お姉ちゃんにそんなこと言う資格あるわけ？誰のせいで嫁にも行かずに介護に追われてると思ってる？デートしようにも、介護に休みはないのよ！」

陽子「何度もパパをうちで引き受けようかって言ってるのに、わたしには無理だって拒んで来たのはそっちでしょう？！」

桜「わけわかんない病気の人に介護なんて任せられるわけないでしょ？！やれ鬱だ、やれ躁だって、ころころ変わってたら、パパの世話なんて無理よ」

陽子「あんたは昔っからそう！わたしのことなんて少しも信用してないのよね！伸夫さんだっているんだから、できるわよ！もう……ばかっ！！」

桜「人がせっかく言ってるのも聞かないで、
どっちがばかよ、ふん！」
陽子「ばかばかばかばか！！」
陽子の手が当たり、ティーカップがひっくり返る。
怒りの余り、立ち去る桜。

○同・玄関
学校から帰って来た一が、引き戸を開けようとしたところで、乱暴に戸が開いて、桜が出て来る。
一「桜ちゃん」
桜「いっちゃん、退院おめでとう。今日はもう失礼するけど、また遊びに来てね、しばらくここには来ないから！」
一「……」
早歩きで去っていく桜を見送る、一。

○同・リビング
お茶のこぼれたテーブルを拭く伸夫。

脱力してソファに寄りかかっている陽子。
一、その様子を少し覗き見し、黙って自室へと立ち去る。

○同・キッチン（翌朝）
伸夫、朝ごはんの支度をしている。
一、学生服姿で入ってくる。
伸夫「おはよう」
一「…うん」
伸夫「お母さんのとこにこれ、も、持ってってくれない…か」
伸夫が視線を向けた方に、朝食の盆が載っている。
伸夫「あ、あと、これ」
伸夫、薬と水のコップを置く。
伸夫「ちゃんと、く、薬、飲むように、言ってな」
一「…うん」

○同・夫婦の寝室

陽子、ベッドに寝ている。
カーテンは閉まったまま。
掛け時計の秒針の音だけがやけに大きく
聞こえる。
一、静かにドアを開けて入り、サイドテ
ーブルの上に、盆を置く。
一「これ…ここに置くから」
静かに言って立ち去ろうとする一。
寝言で一に呼びかける、陽子。
陽子「ごめんね、いっちゃん、ごめんね…
…」
一「……」
静かな部屋に、陽子の寝息が染みる。

○同・縁側
ハリーを撫でている、のの。
のの「人懐っこいコだね、ハリー」
一「俺の親友だからね」
のの「ハリーって、どろんこハリー？」
一「うん、絵本の」

のの「誰が付けたの？」
一「あの人」
のの「あの人って、お母さん？」
一「うん」
気まずそうに横を向く、一。
〇同・陽子のアトリエ
静かにアトリエに忍び入る二人。
書きなぐりのような花の絵が、机の上や
床に何十枚も散乱している。
一「昨日からまた寝込んでるんだ。今日は本
人不在で悪いけど……」
壁に飾られている小さな絵を見るのの。
枝にしがみ付いているピグミー・マーモ
セットの絵。
のの「これなあに？」
一「知らない」
一、素っ気なく答える。
一と対象的に、はしゃいでいる、のの。
のの「わあ、絵本がいっぱい！」

一「自分の本も、そこに。あ、気をつけて。物の位置が変わってるとすぐ気付くんだ。俺、外で見張ってるから」

一、アトリエを出て行く。

一人残されたのの、かつての陽子の著作の絵本を本棚から取り出そうとすると、一緒に紙の束が落ちる。

急いで拾い集めようとするが、紙に描いてある絵本の下書きに目が留まる。

一の成長を願う、陽子の思いが書き綴られた、未完の詩と絵。

一枚一枚に見入る、のの。

○同・一の部屋

一、机の椅子に、のの、ベッドに腰掛けて会話している。

のの「一はお母さんの絵本、好き？」

一「好きだった……かな。小さい頃は。あの人の病気が酷くなってから、気持ちが離れ

た」

のの「病気は、悪いことなの？」

一「病気だからじゃなくて、病気だってことが時々、どうしても理解できなくて」

のの「だからお母さん、一がおっきくなって、どうやって伝えたいこと伝えられるか、分からなくなっちゃったのかな…」

一「どういう意味？」

のの「ううん、そう思っただけ。わたしも病気のことは分からないけど、有名な芸術家だって、同じ病気の人、けっこういるみたいよ。ゴッホとか。それってある意味、ギフトだよね」

一「そんなギフト、いらね～。神って残酷だ」

のの「死ぬまで分からないよ、ギフトがどんな幸せをもたらすか」

一「ののはポジティブだな……」

のの「会ってみたいなあ。陽子さん」

一「子どもみたいな人だよ。まあ、調子いい

時は絵、描きまくってるから、そのときに
でも、また」
のの「わたしの絵も見てもらいたいなあ！」
一の部屋の壁に飾ってある、ののが描い
た海のイラストに、波の音が重なる。
○同・リビング
椅子に座っているガウン姿の陽子の肩を
マッサージする、一。
陽子「ありがと、いっちゃん。マッサージ、
上手ね」
一「……」
陽子「この間はごめんね。わたし、いらんこ
と言った」
一「…もういいよ」
陽子「ううん、良くない。ほんと、ごめん
ね」
一「いいよ…」
一、しばらく無言でマッサージを続ける。
一「俺、ハワイの時のこと、覚えてるよ」

陽子「え、ホント？」

×　　×　　×

一の回想。

アラモアナショッピングセンターのハワイの生地の洋服の店で、服と服の間から外を覗く、一（３）の視界。

一の視線、一を必死に探す陽子（３８）を捉える。座り込んで泣き出す陽子。

出て行くのを少し躊躇している一。

×　　×　　×

一「あのとき、ホントにいなくなろうと思ってた」

陽子「そうなの…」

一「でも気づいたら、自分から出てってた」

陽子「いっちゃんも、泣いてたわ」

一「それは覚えてないけど」

陽子「良かった、いっちゃんが見つかって」

一「……」

マッサージを続ける、一。

一「今度、会わせたい子がいるんだ…」

陽子「あら」
一「あ、そういうんじゃなくて、……会いたいって言ってる子がいて…絵、描いててさ。落ち着いたら、でいいんだけど」
陽子「そうね、悪いけど、もうちょっと、元気になった時にね……」
ため息をつき、椅子に寄りかかる陽子。
マッサージを続ける一。

○陽子のアトリエ（数日後）
射し込む陽光。
はりきっている陽子。服装も派手。
陽子「ごめんなさいね、お天気が良いとなぜか調子いいのよ。っていってもまだちゃんと描けないんだけど……」
笑顔ののと、仏頂面の一。
一に目配せするのの。
のの「わあ～、素敵なアトリエですね」
初めてアトリエに入った振りをする、のの。

×　　×　　×

のの、陽子に描きためたイラストを見せる。

楽しそうにイラストを覗き込む、陽子。

陽子「自分以外の人の描いた絵を見るのなんて、とっても久しぶり。気持ちが解放される感覚ね」

陽子、窓を開ける。

その瞬間、カゴから放されていたインコのソラが飛び出て行ってしまう。

陽子「あ！」

一「何やってんだよ！」

怒りを露わにする、一。外へ走って行く。

座り込んで頭を抱える陽子。

陽子「ああ、どうしよう……」

のの「大丈夫、一、きっと見つけてきますよ」

陽子「ああ、ダメ……ののさん、今日はここでごめんなさい」

陽子、ふらふらと、寝室へと去る。

×　　×　　×

一、戻って来る。

一「ダメだ、見つからない。あの人は？」

のの「寝室に行ったみたい。具合悪そうだったよ」

一「またかよ……」

一、呆れてため息をつく。

のの、本棚から未完成の絵本を取り出し、あるページを開いて、一に見せる。

のの「お母さんのこと、そんなに責めないで。お母さん、一のこと、こんなに大事にしてる」

ののが差し出したページには、ピグミー・マーモセットと幼い一が手をつないでいる絵。

『いつかまた、いっしょにピグミーに会いにいこうね』と書いてある。

のの「今は絵本が描けなくなって、愛情の伝え方が分からなくなってるだけ」

メッセージを指でなぞる、一。

○同・一の部屋（夕方）

未完成の陽子の絵本を、一ページずつ、念入りに見つめる、一。

震える、一の背中。

○同・夫婦の寝室（夜）

外の街灯の明かりが、カーテンを通して入ってくるだけの、薄暗い部屋。

一、ベッドに潜り込んでいる陽子の近くに座る。

陽子、布団を被ったまま、一に訊く。

陽子「ソラ、いなくなっちゃった？」

一「うん」

陽子「ごめんね…母親失格だ…わたし」

布団を深く被り、体を丸める陽子。

一「…仕方ないよ……」

陽子の肩に手を置こうとするが、躊躇い、その手を下ろす、一。

一「あのさ、ピグミー・マーモセット……」

その単語に反応したように、布団から顔を出し、一の方を向く陽子。
陽子「覚えてるの？いっちゃん」
一「うん、ずっと忘れてたけど…思い出したんだ、うっすらとだけど……」
陽子「どうして？」
一「いや、別に、なんとなく……」
陽子「…懐かしいなあ」
一「……」
陽子「よいしょ」
陽子、上半身を起こし、ベッド脇の電気スタンドの明かりをつける。
一「えっと……」
陽子「もう少し、ここにいて。お願い」
一「…うん」
陽子「ありがと。いっちゃん、覚えてるかな。ピグミー・マーモセットに会ったのはね、いっちゃんがうちに来て初めての動物園だったのよ。いっちゃんに素敵なモノたくさん見せたくて。家族で富士山見に行った帰

りに寄ったの」
一「……」
陽子「富士山もきれいだったけど、わたしもいっちゃんも、ピグミー・マーモセットにすっかり夢中になっちゃって」
×　×　×
フラッシュ。
目を輝かせて動物園の檻を覗き込む一（３）を抱く陽子（３８）。
二人とも、楽しそう。
×　×　×
陽子「なんか、いっちゃんみたいだったのよ。儚げで、小さくて、守ってあげなくちゃって……」
一「……」
下を向いて、涙をこらえている一。
陽子「あれ？いっちゃん、どうしたの？泣いてるの？」
一「な、泣いてなんかいないって！」
陽子「あのときも、いっちゃん、かわいいね

って泣いたのよ」
一「泣いてないって……」
陽子「わたしの中で、一番キラキラしてる思い出よ…また会いたいなあ、ピグミー…」
一「……」
陽子「ごめん、なんか頭痛くなっちゃった。やっぱりダメだ、わたし。ごめんね、いっちゃん」
一「薬、持って来ようか？」
陽子「ううん、大丈夫。ちょっと寝るね、ごめん」
一「そんなに謝らないでよ…」
陽子「ごめん」
陽子の言葉に反応して、少し笑い合う二人。

○春木家・リビング（夜）
伸夫のノートパソコンで、「ピグミーマーモセット　東京」で検索する一。
「ながいき動物病院」の永井浩太郎（５

２）のブログが出て来る。
ブログを辿ると、ピグミー・マーモセットを手に乗せながら、動物の素晴らしさについて語る、永井のインタビュー動画が出てくる。
動画を再生する、一。
永井「いや～動物好きが高じて、うちの庭に珍獣の飼育部屋を作ったくらいです。ピグミー・マーモセットの家族をはじめ、フェネック・ギツネ、ナマケモノ、リスザルなどを飼育しています。みんな僕の家族であり、宝物なんですよ」
一、動画を停止して、「ピグミーマーモセット　値段」で検索する。
業者のサイトが出て来る。
ピグミー・マーモセットの写真と、一匹八十数万円の表記。
一「チッ（舌打ち）」
動画に戻って、先を見る一。
インタビューの質問がテロップとなって

出て来る。
テロップ「先生のお気に入りの動物は？」
永井「そりゃあ、苦労して繁殖にも成功した、ピグミー・マーモセットですよ。つがいが子供を産んで、五匹になりました」
一「そんなにいるなら、一匹くらい……」
さらに調べ物をしようと、パソコンを覗き込む、一。

○ながいき動物病院・外観（数日後）
建物を見上げる、一とのの。

○同・庭
一が庭に忍び込み、ののが見張り役になって、ピグミー・マーモセットを一匹借り出す計画を遂行しようとしている様子に、二人の電話での会話がオフで重なる。
一（声）「違う違う、借りるだけ。ちゃんと返すって！毎週日曜の朝はゴルフに出かけるらしいからさ、今度の日曜に……」

のの（声）「陽子さんのためなら協力したい
けど…勝算はあるの？」
一（声）「やってみないと分かんないだろ？
策はあるんだ」
のの（声）「うーん……」
一、珍獣の飼育小屋はセキュリティが厳
しく、足止めを食らっている様子。
一が持ってきた針金は、何の役にも立た
ない。
針金を見て、呆れ顔でため息をつくのの。
そうこうしているうちに、誰かが帰って
来て、二人は見つかってしまう。
しかしそれは、一の叔母の桜だった。
桜「あれ、いっちゃん？」
一「あれ、桜ちゃん？」
きょとんとした顔で一と桜を見る、のの。
〇同・住居部分リビング
一とののにお茶を淹れる桜。
棚の写真立てに、エプロン姿の永井と桜
が料理を前に、並んで笑っている写真。

桜「そーよ、永井先生、うちの料理教室の生徒よ。料理の勘がいいの。で、いろいろあって、今日は、動物たちの様子見てくれって頼まれて」

鍵を見せびらかす、桜。

のの「それって、合鍵？！」

桜「だといいんだけど、なかなか進展しなくてね…」

のの「素敵、大人の恋ですね！」

桜「大人って複雑なのよ。あの人、バツイチなんだけどね。わたしは5年以上一人だったし。いろいろと久しぶりで…あら、わたしったらこんな話」

のの「ますます大人って感じ！！」

照れながらも得意げな桜と、目をキラキラさせるのの。

桜「こんなにおばさんになってから、ドキドキが訪れるなんてね～、いっちゃん、お姉ちゃんには黙っててよ。でもお父さんの介護ばかりじゃ、女が死んじゃうわ。分かる

わよね」
一は桜の恋バナには興味が無い様子で、
話を進めようとする。
一「じゃあ、話が早い。桜ちゃん、一生のお
願いです。永井先生のペットのピグミー・
マーモセットを貸してもらえるように…
…」
のの、一の言葉を敬語に訂正する。
のの「貸していただけるように」
一「貸していただけるように、頼んでいただ
けないでしょうか？！」
一とのの、深く頭を下げる。
桜「えー、何、狙いはピグミーだったの？」
一「多分、あの人を救う、唯一の方法なんだ。
分からないけど、ピグミー・マーモセット
にまた会えたら、あの人、きっと何か取り
戻すんだ。だから、お願い！」
桜「えー、どうしようかなー？この間、いっ
ちゃんのお母さんとは喧嘩しちゃったし…
それに、だいたい、どうやって説得するの

よ？！」

一「えっと…」

　ののに助けを求めるような視線を送る一。

のの「じゃあ、こういうの、どうですか？桜さんと永井先生の恋が進展するように、わたしたちが全面協力する」

桜「それって、つまり？」

　一にウインクする、のの。

○桜の家・外観（数日後の夜）

　古い作りの一軒家。

　入り口に、上野料理教室の看板。

○同・栄治の部屋（夜）

　上野栄治（８４）の介護をする一とのの。

　寝たきりの栄治を二人で協力してトイレに連れて行ったり、食事の世話をしたりして、苦労している。

のの「今頃桜さん、永井先生と」

一「うまく行くかなあ」

のの「大丈夫よ、わたしたちのお願いを口実にして、デートに漕ぎ着けたんだから。わたしの書いたシナリオ通りに話が進んでくれれば、絶対成功する！」

○ビルの最上階のレストラン（夜）

ドレスアップした桜とスーツ姿の永井、向かい合って、テーブルに着席している。ワイングラスを傍らに、永井に懇願する様子の桜。

腕組みして考え込んでいる永井。

○春木家の近くの路上（数日後）

歩いて来る一とののと桜、そして永井。

永井、ピグミー・マーモセットの入ったキャリーケースを持っている。

一「うち、もう見えてます」

ふと立ち止まる、桜。

桜「やっぱり、わたしはやめとくわ」

永井「仲直りのチャンスじゃないですか、さ

あ。わたしが何のために来たと思ってるんですか」

桜「何の、ため？」

永井「あなたとわたしのためですよ」

永井、桜に向かい合う。

大事そうにキャリーケースの上に手を置きながら、桜に語りかける。

永井「他人には貸せないくらい、大事な宝物なんです。この子は」

桜「……」

ハッとする、桜。

のの、気を効かせて、一の肩を両手で掴み数メートル進んで、家の前まで来る。

訳が分からず、後ろを振り向く一に、のの、二人の邪魔をしないようにと耳打ちする様子。

二人きりになった、桜と永井。

永井「結婚してください」

桜「この間仰ってた条件って…」

永井「はい。結婚してください、桜先生」

桜「永井先生…」

永井「先生っていうの、やめましょう、お互いに」

桜「はい」

永井「行きましょう」

永井、桜の手を取る。

桜、恥ずかしそうに俯く。

○春木家のリビング

一とのの、リビングに入って来る。

永井に急かされて、続けて入る、桜。

ガウン姿の陽子、リクライニングチェアに腰掛けて本を読んでいる。

伸夫、お茶を運んで来る。

一「あのさ、ちょっといい？」

陽子「え？あら？桜ちゃん？」

桜「ごめん、お姉ちゃん。また来ちゃった」

陽子「なんで？そちらは？」

一「ちょっと、目つぶっててて。俺が、いいって言うまで」

後ろから、陽子の目を両手で隠す、一。
陽子「何なの？」
一「いいから」
桜に向かってうなずく、一。
桜「ちょっとごめんね、お姉ちゃん」
桜、そっと陽子の手を取る。
永井、ピグミー・マーモセットのマーモをキャリーケースから取り出し、陽子の手にマーモを乗せてやる。
陽子「え、何？」
桜「優しくね」
一「いいよ、目開けて」
一、陽子の目から両手をゆっくりと離す。
陽子「……」
マーモを見ると、信じられないという表情を浮かべる。
陽子「えーーーーー」
マーモを愛おしそうに見つめる陽子。
陽子「……」
陽子とマーモを見守る、一、のの、伸夫、

桜、永井。
静かな時間が流れる。
陽子「ありがとう、いっちゃん、桜ちゃん…」
伸夫「……」
伸夫、手で密かに涙を拭っている。
マーモ、陽子の手のひらで安心して眠ってしまう。
目を細める、陽子。
一とのの、満足そうな笑みを交わす。
安らかな時間が流れる。

○葉山あたりの神社（数日後）
神社にお参りする一とのの。
お参りを終えた後、自慢気なのの。
のの「ね、絶対叶うでしょ？願い」
一「うん、ひとつ叶った」

○葉山あたりの、ののお気に入りの海岸
再び同じ場所に立つ、一とのの。

のの「ねえ、一は、将来、何になりたい？」
一「航海士。船の免許取って世界中を見たい」
のの「へえ、素敵。わたしはね……」
一「絵描きだろ？」
のの「うん、画家になりたい。絶対なろ！
ううん、わたしたちなら、絶対なれる！」
一「おまえって、いつも自信満々な」
のの「ううん、違うよ。闘ってるだけ。今の自分が置かれた環境と」
一「俺なんか、家庭環境も、いじめも、シカトして逃げてるのに」
のの「一だって、闘ってるんだよ、生きてるだけで。それに、いっこ願い叶えたじゃない。お母さんの、夢。逃げずに」
一「あ、うん、そうか」
のの、海に向かって高らかに叫ぶ。
のの「画家になる！」
一、ののに続いて叫ぶ。
一「航海士になる！」

キラキラと輝く海に向かって叫ぶ二人を、
日傘を差した陽子が呼びに来る。
二人の隣に並び、陽子も叫ぶ。
陽子「また絵本を描く！」
一M「あなたをいつか、母と呼ぶ」
陽子の横顔を見つめる、一。

○葉山あたりの砂浜
砂浜を歩く、一、陽子、ののに、伸夫、
ハリーが加わる。
波がキラキラと、四人と一匹に、光を送
っている。
エンドロール。

了